

國學院大學學術情報リポジトリ

これまでの琉球方言アクセント研究とこれから：
特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 善道, Uwano, Zendo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000426

これまでの琉球方言アクセント 研究とこれから

上野善道

0. はじめに

これまでの琉球方言アクセント研究を概観した後、今後進めるべき課題を述べる。琉球方言のアクセント研究だけに絞っても、過去の研究を網羅的に対象とすることは不可能であり、あくまでも私の観点から主要と思われたもの、および、特に「これから」の視点に立ったときに従来見逃されたままになっていたと思われるものを中心に取り上げる。なお、音調記号は〔上昇〕と〔下降〕に統一して引く。

1. これまでの研究

便宜上、時間幅は異なるが、戦前、戦後、現在の3期に大きく分けて見ていく。

1.1 第1期（戦前）

1.1.1 琉球方言のアクセント研究も、本土方言と同様、服部四郎1933, 1937に始まる。ただ、与那嶺、首里、那覇、喜界島阿伝の各方言をかなり詳しく調査したはずであるが、本土とは大きく異なる分節音や活用形を持つ琉球方言の概説に時間を要し、アクセントについては断片的な言及で終わってしまったことが惜しまれる。

1.1.2 続いて平山輝男1937, 1940などが出た。平山は、この期に限らず、奄美・沖縄各地を回って大著を含む多くの論考でその大枠の分布を明らかにし、その後の研究の基盤を築いた。ただし、その与那嶺方言に対する批判（服部1937）⁽¹⁾に見るように、音調型記述に正確さを欠く点や、*sjɪ[ru]*:（白）、*[du]*:（体）などの型の採録洩れが指摘されている。

1.1.3 これまで注目されてなかった⁽²⁾ものに、母方言の那覇方言を記述した大湾政和1933, 1937a,bがある。その分析は誌面の関係で別稿に譲らざるを得ない

が、その6モーラ名詞までの資料について、文節次末下降禁止制約と2モーラ単位のフット形成規則（重音節は自動的に1フットを形成）を用いて分析すると、2モーラ語、3モーラ語までは3つの対立（ただし、2モーラ語単独形では3対立が1つに中和する）、4モーラ語には5つの対立、5モーラ語と6モーラ語には一部不明の点があるものの5つ（ないし6つ）の対立があり、全体として、那覇市方言は五型アクセント体系である可能性があることになる。5、6モーラ語の解釈次第では多型アクセントの可能性もなお残すが、少なくとも三型アクセント体系でないことは確実である。その後の研究から振り返って見てのことになるが、今回もまた、南琉球とは異なるアクセント体系が北琉球に見つかったことになる。この80年以上も前に書かれた資料を見直すことによって、これまで知られていなかった体系の存在がほぼ確実になったと考える。

1.2 第2期（戦後）

1.2.1 この期も服部四郎1954[1960]に事実上始まり、首里方言が二型アクセント（ただし、長い複合語には末尾の1～2モーラの低くなる第3の型がある、との注記に注目）、奄美大島大和村大和浜は音韻構造により型は異なるが一型アクセントである⁽³⁾、との記述がある。

のちの研究に大きな影響を与えたのは、服部、徳川宗賢、上村幸雄が参加した九学会連合の奄美調査の報告、中でも服部1959[1959]である。本土方言における金田一類別語彙に代わるものとして、(1)の琉球方言1、2音節名詞の類別語彙案を提案し、その観点から奄美諸方言はもとより、沖縄本島とその離島、さらに宮古島と石垣島までの諸方言を、第1種から第4種に分類している。従来 の類による12/3/45説などを批判したものである。

(1) A 鼻₁ 飴₁ 風₁ 橋₂ 石₂ 音₂ …… (下付き数字は名義抄に基づく金田一の類)

B 花₃ 島₃ 鑿₄ 汗₅ 雨₅ 亀₅ ……

C 甕₃ 蚤₃ 舟₄ 箸₄ 声₅ 桶₅ ……

a 毛 葉 血 瀬 ……

b 木 齒 乳 巢 ……

また服部は、仲宗根政善の要請により1955年に3か月間沖縄に滞在し、琉球大学で講義をした。これで琉球方言研究の種が蒔かれ、「琉球方言研究クラブ」の発足に繋がった。その『琉球方言』には服部新分類に基づくアクセント調査報告が出ている（特に大山成子1962）。

1.2.2 仲宗根の琉球大学の後任が上村幸雄である。沖縄言語研究センターでのその活動は贅言が不要であろうが、前任の国立国語研究所時代に刊行した首里方言を対象とした『沖縄語辞典』（1963）は、その後の仲宗根1983を初めとする各種の方言辞典の先駆けとなった金字塔である。その首里方言の音調に関し、(2)に要約した指摘がその「解説篇」にあることに注意したい。これには「本文見出

し語のアクセント記入の際はこの事実に気付いておらず、一部不十分な箇所があるように思われる」との注記があることも目を引く。

(2) ①型と②型の二型で、すべての文節が平板型、下降型のいずれかに属するが、一部の複合語および種々の助詞や接尾形式の付いた形には、ʔuukuba]a ①(奥歯)【この下降付きで辞書に掲載済み】、kagusimama]di ①(鹿児島まで)、'judoote]era]a ①(読んでいたのなら)など二次的な下降をもつものがある⁽⁴⁾。(p. 54)

1. 2. 3 平山輝男は、第1期に引き続き、大島一郎、中本正智等々の門弟と一緒に沢山の論著を発表している。その結論は、(伝統的な類に基づく)「2拍名詞類別対立地図」として描かれている。この時期は、用言の活用や基礎語彙も含めた「総合的研究」に力が注がれている。

1. 2. 4 この期に上野善道も琉球方言のアクセント研究を始めた。1975年の東大言語学研究室の奄美德之島方言調査に参加し、浅間集落の岡村隆博氏に会えたのがきっかけであった。岡村を話者とした柴田武1960を補訂した後、浅間他数地点の予備調査をして服部分類の正しさを確認し、それを前提とした調査表を作成して奄美諸方言調査を実施することにした。

具体的には、最初の4頁で概要がつかめるようにと、i. (対応本土方言の) 2モーラ、ii. 1モーラ、iii. 3モーラの各名詞、iv. 2～4モーラ動詞・2～3モーラ形容詞として2頁目までは服部類別語彙(とその補い)を並べ、その1モーラ語幹には他の対立の可能性として

(3)「mI: (兄), pa: (外), du: (体, 自分), bo: (棒), ʔwa: (豚)」などを入れた。服部語彙にない3モーラ名詞は、浅間方言(次の()内の形)などの調査に基づき

(4)「畳, 鼻血, 小豆; おなご, 鏡, 命; 刀, 火箸, 兎」([hana:]zI; kagami[:; kata:[na)

の3種(後の松森晶子のA類, B類, C類に当たる)を入れ、さらに他の可能性として

(5)「松木(松), 鯨, 八重歯」など

を適宜加えた⁽⁵⁾。5頁以降は、金田一語彙で琉球方言に対応形があると予想される単語をそのまま並べた。最後に、(6)の4モーラ以上の単語(主に複合語)を若干入れてある。

(6)「九つ, 正月, もち米, 蓬餅, 宝物, 話し声, 水溜まり」など

この調査表は、実際に調査をしながら微修正をして行った。調査は奄美群島の事実上の全集落で実施した。その結果の全資料報告は、喜界島, 大島旧笠利町, 龍郷町, 沖永良部島和泊町, 知名町までは済ませたが、その後は中断している。その調査の結果から興味深いと思った地点をやや詳しく再調査し、いくつかの論文を発表した。「これから」の研究課題に繋がるので、その要点の一部はこの後

適宜言及し、第2節においてある程度まとめて述べる。

1. 2. 5 私の調査は、先行文献を参照することなく自分の耳を頼りに行なったが、調査時に参照すべきだったと反省しているものがある。寺師忠夫1961の母方言、旧名瀬市金久（なぜしかなく）アクセントの報告である。1905年生まれ of 寺師によると、2モーラ語には

(7) to[:(蛸), [to[:(さあ!), [to[:(平地) の3対立（「低音域, 中音域, 高音域」）があり（音調表示は一部変更。[○][○は高音域の中での上昇型）、さらに、

(8) ka[jě (粥) と [ka[jě (交換), [kju]: (今日) と [kju]: (旧暦) などの対立もある。そして第3の高音域型には（音声表示も一部後述の私の方式に統一）

(9) [ko[ra (川), [ku[cji (口)

も属するとする。また、1モーラ語はすべて単独では中音域だが、助詞付きでは高音域の[mi[nu (実が) となる。そして、3モーラ語以上にはすべて3系列の音域の別があってそれぞれに2つ、計6つの型が区別されるという。あたかも「3式と核の位置（と有無？）」の対立のような体系である。他の品詞も含めたより詳しい記述が、すでに寺師1956にある。

にわかに信じがたい面もあるが、無視するわけにはいかない。[ko[ra (川) は「かはら (川原)」に由来する長母音形コーラを経た形で、服部も寺師自身の発音で確認している（概略コは中、ラは高で、「倉」の低中と対立。「俵」も「川」に同じ）。1モーラ名詞も、元は長母音形が短縮したものと考えられる。また、私の話者は旧名瀬市伊津部（いつぶ、沿岸部の金久とは方言が異なるという）出身で明治と大正1桁生まれの3人で、個人差もあるが、

(10) 「口、蓋、草、糞」は ku. [cjinu など

と記録しており、助詞の続き方が、他の（無声化[.]するものも含む）

(11) ku. sji[nu (腰、背中), kura[nu (倉) など

と異なる。*[ku. cjinu と *ko[sjinu の段階が想定される。なお、「川」は [ko: だけであるが、

(12) 「俵」は [to:ra の人と [tora の人

がいる。そして、3モーラ語には5つの対立を記録してある。従って、話者は次の世代になるしかないが、3モーラ語以上の寺師語彙による確認調査が今後の課題の一つである。寺師の第4編語い編の約2500語に、ごく一部しかアクセントが付いていないのが惜しまれる。

1. 2. 6 もう一つ、この期のもので十分に考慮・検証されていない論に日下部文夫1968, 1984[2018] がある。前者は沖縄本島北部158地点の調査の結果、各音節の母音の長短を含めた音調型を考慮すると、これまでの類の代表語彙では不足で、この地域の2音節名詞アクセント項目として計11類を設定する必要があると主張している。(13) を参照（配列はママ）。

- (13) 1. 風 [hazji] 5. 水 mi[zji] 7. 牙 [Ki:ba:
 2. 昼 [Pi]ru[: (大文字は喉頭化音) 8. 斧 ?u:[nu
 3. 山 ja[ma] 10. 琴 kuTu[: 9. 指 ?u[ibi
 4. 海 [?umi] 11. 猫 mi[ja]: 5. 猿 sa:[ru]: (音調型は大宜味村塩屋の例)
- 下線を引いた「水」が第1類とは別行動を取ることは、私が調査した浅間方言や与論島麦屋方言で、単独名詞としては「風」と同じながら、それを前部要素に持つ複合名詞になると「水」はしばしば低起式で出て式保存の例外になる事実と符合する。「竹」も単独名詞自体が時に例外になるが、これは語頭の有声化(ダキ)との関連が指摘されている。この2語以外にも日下部論文には「水」と同類の単語が列挙されているが、私のデータではそれを裏付ける現象は得られていない。なお、「琴」は一般的な日常語であったかの確認が要る。

後者は、それに奄美を加えた200地点で1音節名詞を中心に調査したもので、1音節名詞に「棒、毛(モー)、豚(ワー)、櫓、声、今日、竿」などを加えると、国頭・大宜味方面などに高平調、下降調、低平調、上昇調の「4類対立」の体系が見つかるとする。それを「短短格、長短格、短長格、長長格」の韻律格と「高い核、低い核」の2つの核で解釈をしている。独自の説で、説明も分かりにくく、私の調査地点と重なる地区での結果も一致しないのでこれまで言及して来なかった。しかし、1類(「身」)と2類(「葉」)で、あるいは3類の中の「根」と「木」で対立する地点が10地点ほど上げられており、解釈以前に一度はきちんと事実の検証をする必要があると考え、ここに取り上げた。

1.3 第3期(現在)

これは今の現役の世代が中心である。近年の研究動向で特に進展の著しいのは、比較研究と南琉球アクセントの記述研究である。研究者としては松森晶子の活躍が目立つ。

松森は、2010等一連の論考で服部の類別新分類を發展させて「琉球方言系列別語彙」を提唱している。ここに「類別語彙」としていないのは、2つの理由があると見られる。一つは、琉球方言は音変化が激しく、対象語彙のモーラ・音節構造が方言によって異なることが珍しくない。そのため、本土の類別語彙のような「何モーラ名詞」という語形の長さで提示するのが困難なことが少なくない。にもかかわらず、長さが変わってもそのアクセント属性は元のものを保つことが多いことから、これを「系列」という属性の反映と捉えようとする。

今一つは、琉球方言アクセント祖体系として、1拍語(ここは私の用語で、モーラでも音節でも他でもよい)に2種類、2拍語に3種類(ここまでは服部に同じ)、そして3拍語にもA類、B類、C類の3種類からなる「三型アクセント」を想定しているからである。

松森の記述を見ると、三型と断定しておらず、他の型の存在も否定していない

ようにも見えるが、私の観点からすると、「系列化」が成り立つのはまさにN型アクセントだからと考えるので、その仮説は自ずと「祖体系三型アクセント説」と位置付けられることになる。

この三型アクセント仮説は、今や主流となり、多くの人が従うところとなっている。そして、同じ前提の上に立って松森案を改訂増補した五十嵐陽介の調査語彙リスト（最新版は2018）も提唱されている。この三型アクセント仮説に対する私見の一部は第2節で述べる。

南琉球方言とは、宮古島、多良間島、池間島、黒島、波照間島、小浜島、西表島などの方言を指し、従来二型アクセントとされていたが実際は三型アクセントであること、その大部分には「PW」と呼ばれる韻律単位の認定がそのアクセント体系を把握するために不可欠であることがここ数年で急速に明らかになってきている。このPWは、通常の「韻律語」（私の「アクセント単位」）ではなく、それを構成する要素（私の「拍」）に当たるものなので、名称としては問題があると考えるが、重要なのはその内容で、それまで誰も考えていなかった大きな発見であったと考える。これらの地域に携わっている研究者は、松森、五十嵐の他、青井隼人、新田哲夫などがある。その刺激のもとに、他の島々の研究も進みつつある。

2. これからの研究課題

2.1 全体的な記述：多型アクセントではないかの確認が必須

一言で言えば、アクセント体系全体の解明に至っている方言がまだまだ少ないのが現状で、まずはこれを明らかにする必要がある。琉球方言はほとんどがN型アクセント（語声調）体系だとする説も多いし、祖体系三型アクセント説を背景に、それを前提としているかに見える調査さえあるが、私の調査では多型アクセント体系がいろいろ見つかっている。奄美大島の龍郷町戸口（たつごうちょうとぐち）方言、奄美市名瀬芦花部・有良（あしけぶ・ありら）方言（式音調まで持つ）、旧名瀬市街地方言、徳之島浅間方言⁽⁶⁾・西犬田布（いぬたぶ）方言、与論島諸方言などがそうで（文献は略すが、たとえば上野2000を参照）、久米島にもある。その他にも、生塩睦子1985などの伊江島方言、ローレンス近刊の瀬底（せそこ）方言（内間直仁の記録の分析）もあり、決して少ない数ではない。

N型とされている地域でも、喜界島のように三型であることが確実な方言もある（それでさえ地名語彙を精査するまでは一部は二型と見誤っていた）一方で、1～3拍語までの単純語調査で3つの型だったとしても、もっと長い単語も沢山調べないと三型体系との確定ができず、多型体系の可能性が残ったままの方言も多いのではないかと見られる。結果がどうであれ、すべての基礎になる事柄なので、その確認が必須だということを強く訴えたい。その際は、四型、あるいは前

出(1.1.3)の那覇方言のように五型体系の可能性も考えておく必要がある。

そのためには複合語の調査が不可欠であるが、問題は、本土方言のように漢語・外来語を組み合わせて自由に作れる仕組みとは異なり、琉球方言の伝統語彙の中で複合語がどういう形でどれくらい存在しているのかがつかめず、適切な調査語彙を探すのが大変な点である。生産性の高い和語の組み合わせを活用するのが一案であるが、昔の生活を知らないと「下駄箱、靴箱、ゴミ箱、箸箱、絵の具箱、おもちゃ箱、郵便箱」などを用意して行っても、「昔はそんなものはなかった」でおしまいとなることもある。複合語を沢山収めた地元の方言集があれば活用できる(実際、沖永良部島皆川方言ではそれを行ない、多型体系と判明した)。

よく研究されて二型アクセントの典型とされてきた首里方言の体系でさえ、長い複合語を含む(2)を見ると、実は平板型と下降型とされてきたものは「式音調」⁽⁷⁾であって、そこに下げ核の有無による対立を認めるべきではないか。そうなると、両式に無核と有核があることになり、少なくとも四型となる。さらにそれらが1単位形だとすると、有核の中は位置による対立さえある可能性まである。あるいは、本稿では省略した那覇方言のような過程で導入される下降もあるのかもしれない。なお、私は那覇市垣花方言でも2度の下降を観察している。[Fun]sjiNKa(船乗り仲間)に対して、助詞付きは[Fun]sjiNKa]nuなどである。

これらを踏まえた考察の結果として最終的に二型アクセント体系だと判明したとしても、それは現行の二型説よりもはるかに高いレベルのものであって、その意義は極めて大きなものとなる。

また、与那国方言は、私の調査でも平山・中本1964と同じく三型アクセントと見るが、複数単位形に分けても型に収まらない複合語が見つかっており、未解決の課題である。

もしかすると、N型と多型の区別は、本土方言のように截然と分けられないのかもしれない。究極的にそうであるならば、それはそれで一つの貴重で重要な類型的位置づけになる。ともかく、今のままの状況では、それさえ答えが得られない状態が続くだけである。

2.2 前接語が付いたときの振る舞いの調査も不可欠

後接語である助詞等についても、その可能な連続とそれらが付いたときの音調型の記述がまだまだ必要であるが、前接語になるとほとんど取り上げられていない状況である。その中において、服部1937[1959]は、いち早く(14)の交替現象を与那嶺方言で記述している。

(14) pa[na: (鼻) pa[na:]nu (鼻が⁵) ; pana[: (花) pana:[nu (花が)

[?ja: pana:] mju[N (君の鼻を見る) ; ?ja: pana[:] mju[N (君の花を見る)

hu[nu pana:] mju[N (この鼻/花を見る) ; hunu pana[:] mju[N (この花を見る)

[?ja: pana:]nu (君の鼻/花が), [?ja: pana:]ja (君の鼻/花は)

後続の型に応じて ?ja:, hunu 自体の音調が変わることと、直前が高い環境では「鼻」と「花」の区別がなくなることが注意を引く。

一方、これとよく似ている徳之島浅間方言は、私の調査では (15) のようになっている。

(15) [pana: (鼻) [pana:]nu (鼻が⁵) ; pana[: (花) pana:[nu (花が)

[?ja: pana:] mju[N (君の鼻/花を見る)

[kuN pana:] mju[N (この鼻/花を見る)

[?ja: pana:]nu (君の鼻/花が), [?ja: pana:]ja (君の鼻/花は)

すなわち、前接語の後では、「鼻」と「花」の対立は完全になくなってしまう。(この点から見て、(14) の [?ja: pana:] mju[N は「君の鼻/花を見る」ではないのか、確認を要する。) 浅間方言のこの交替は、(16) のように低起式語の最後の重音節(下部線)の直後で下降する形で起こる。

(16) ta:ku[buN] (タバコ盆) [kuNta:kubuN]nu

cjaba:[sI]ra (茶柱) [kuNcjaba:]sIranu

hu:cl[muccI:] (蓬餅) [kuNhu:clmuccI:]nu

また、同じ徳之島の西犬田布方言では、(17) の交替が起こる。

(17) [tumari (泊) [tumari]nu [kuNtumari]nu *[tumari]

kaga[mi (鏡) kaga[mi]nu [kuNkagami]nu *kaga[mi]

kata[na (刀) kata[na]nu [kuNkata]nanu *ka[ta]na

[tata]mI (畳) [tata]mInu [kuNtata]mInu *[tata]mI

単独形でも助詞付き形でも同型である「鏡」と「刀」が、前接語の後では区別され、今度はそれぞれ「泊」と「畳」と一緒になるのである。このことから、かつては右端に示した *付きの形で 4つの対立 のあったことが分かる。それぞれの語例を (18) に掲げておく。

(18) [?agare (東), [Ta:cI (二つ), [Ta:ri (二人), [FucI.ka (二日), [jauka (八日), ...

?omo[tI (表), kuju[mi (暦), tamu[tu (袂), hasa[mi (鉢), nasa[kI (情け) ,...

?ama[ri (余り), kutu[ba (言葉), sjira[gI (白髪), nasI[bi (茄子), ?una[gi (鰻) ,...

[hana]zji (鼻血), [wudu]ri (踊), [kibu]sji (煙), [nIgu]tu (寝言), [juda]ri (涎) ,...

この種の交替現象を、文構造やプロミネンスと関連させながら包括的に扱う必要がある。これは同時に、史的な変化を再建する情報としても貴重なものである。

(17) では *[tumari] が A 類～C 類の枠に納まらない型である。

2.3 琉球方言祖体系は三型アクセントか

これは 2.1 の問題と深く絡むが、私は、この仮説を「前提」とすることに対しては否定的な態度で臨んでいる。ABC の 3 つの類が少なくともあったことは疑いないが、三型アクセントであったと断定するには、まだなすべきことが多くあると考えているからである。それは、前述のように北琉球に各種の多型アクセ

ントがあり、三型アクセントから派生したとするためには逐一その過程を説明しなければならず、次節の tonogenesis で説明できる部分もあるものの、すべてをそれからの派生とするのは現段階では無理だと考えるからである。

従って、系列別語彙に関しても、その設定は高く評価しており、また仮説は明示的な方がよいのも確かではあるが、私は「本土方言類別語彙」に対して、「琉球方言類別語彙」と呼ぶことにしている。長さも、最終的に祖形が再建されれば、それで解決される問題である。

なお、これは系列別語彙自体ではなく、利用者側の問題であるが、その三つの類の中から適当な単語を選んで +nu/ga だけを調査したところ三型アクセントと判明した、という類いの報告にならないように気を付けたい。かつて本土方言類別語彙が流布した段階で、アクセント調査とはその中から適当に単語を抜き出し、それに「が」を付けた発音だけで東京式/京阪式と分類して終わり、とする短絡思考が横行したことがある。それを批判して万単位の語彙リストを作成し、諸処の方言でその調査報告をしたことを思い起こすが、それを繰り返してほしくない。アクセントだけに限っても、その方言で使われている音調に関わるすべてが、活用形や他の品詞も当然含め、記述と考察の対象となることを忘れてはならない。

ここで祖体系に関する諸問題について論ずる紙幅はないので、講演で話題にした中から1点のみを取り上げることにする。それはC類2音節語語頭長母音を古形と見るか新形と見るかをめぐって出された松森晶子2017: 10の仮説である。松森は、その長母音形は北琉球諸方言に限られ、かつほとんど2音節語にのみ現われることを根拠に、北琉球祖語で起こった改新であり、その一段階前は(19)であったと見ている。

(19)	2音節単独形	助詞付き形	3音節単独形
A系列(*HLH)	*[μ]μ	([μ]μ[μ])	*[μ]μ[μ]
B系列(*LLH)	*μ[μ]		*μμ[μ]
C系列(*LHL)	*[μ]μ		*μ[μ]μ

すなわち、AとCの「単独形の発音が同じ*[μ]μとなり、両者の区別がつけにくい。その区別を明瞭につけるために」Cが>*μ[:]μに変化したのが北琉球祖語とする説である。

しかし、下線部の推論には問題がある。2音節名詞単独形のAとCが同じ*[μ]μになった時点で合流してしまい、以後は両者が同じ変化を遂げたと見るのが比較歴史言語学の鉄則だからである。でき上がった形のC系列が*μ[:]μと*μ[μ]μで「整合性」が取れようと、また、(19)と祖体系の両体系が「ほぼ同時に(ほとんど時をおかずに)生じた」ものであろうと、関係ないことで、現在合流を起こしていない限り、A系列とC系列は2音節語でも最初から別の型であったはずである。

私見では、琉球祖語の対立数は未詳であり、従って、祖体系の再建も今は困難

であるが、仮に A～C の 3 系列だけであり、かつ C 系列の語頭長母音化⁽⁸⁾は北琉球祖語の段階で生じた、と仮定した場合、琉球祖体系は (20) のようなものであった蓋然性が高いと考える。

- (20) A : * [○! : * [○! ○ * [○○! ○ (! は下降式に伴う半下降)
 B : * ○ [: * ○ [○ * ○ ○ [○
 C : — * [[○] ○ * ○ [○] ○ ([[は拍内上昇)

そして、C 系列の長母音化は * [[○] ○ > * [[○:] ○ で生じた内的変化と考える

この琉球祖体系 (20) から、ローレンス 2009 の北琉球祖体系 (ただし表記は変え、かつ私見で末尾に下降があると考ええるものには] を付けた) までの変化は (21) であったと考える。C 系列で 2 音節語のみが長音化している方言はその 3 音節語で、また他の環境でも長母音が出ない方言ではそれぞれの環境で、長母音が失われたものと見ることになる。

- (21) A : * [○! ○ > * [○○: !! > * [○○:] (! は拍内半下降)
 B : * ○ [○ > * ○ [[○: > * ○ ○ [:
 C : * [[○] ○ > * [[○:] ○ > * ○ [: ○]
 A : * [○○! ○ > * [○○:] ○ > * [○○:] ○
 B : * ○ ○ [○ > * ○ ○ [[○: > * ○ ○ ○ [:
 C : * ○ [○] ○ > * ○ [[○:] ○ > * ○ ○ [: ○]

2.4 新しいアクセント型の発生 (tonogenesis)

それ以前にはなかった新たな型が生まれることがある。今、声調に限らず、新しいアクセント対立の発生もこの伝統的な用語で呼ぶとすると、これまでの私の分析では、旧笠利町佐仁方言 1 拍語の語頭子音の有声／無声 (喉頭緊張化鼻音は後者に入る) の他、旧名瀬市芦花部方言の式音調を生み出した語頭 2 拍の融合 (長母音を経た短縮) と語頭無声化拍、同方言の動詞の対立を作り出した半母音と子音の脱落の違い、喜界島方言の動詞継続相のアクセント対立を生んだ形態素の融合による例が分かっている (詳細は上野 2000 などを参照)。

この研究は、祖体系を考える際に必須となる。現実にある対立がそのまま祖体系に遡るとは言えなくなるからである。n+1 の対立数を持つ与論島諸方言において、長い複合語で語頭寄りに昇り核をもつ型は、その前部形態素が同じ位置に核をもつものであることが目立つ。となると、複合語前部要素によって新たに生じたものであることが明らかになる可能性も残されている。今のところ、他に tonogenesis を取り上げた論は、麻生玲子・小川晋史 2016 の波照間島方言ぐらいである。さらに各地で調査を進める必要がある。なお、tonogenesis においては、そもそも系列化は問題とならない。

注

- (1) この部分は、服部1959『日本語の系統』に再録された際に、完全に削除されている（p. 375の後半以降）。その理由は全く不明である。
- (2) たとえば服部1959〔1937〕は、大湾1937aを取り上げて批判を展開しているが、那覇方言のアクセント記述の内容そのものには何も言及していない。他にも内容を論じたものは未見である。
- (3) 大和浜方言は、私の調査ではアクセント対立がある。2モーラ語の例で示すと、ʔi[sji（石）、[ʔi]sji[nu（に対して）[Ma]cI（火）、[MacInu, ku_o][sji（腰）、[ku_o][sji[nu（に対して）Ku_o][cɛi（口）、Ku_o][cɛi[nuで、「口」には「串、草、櫛、糞」等が属し（後出の名瀬市方言の（10）（11）も参照）、他に[hɲaku（百）などもある。地名の読みも「やまたま」ではなく「やまとま」であった。なお、長田須磨氏には会う機会がなかった。
- (4) この点は、私もかつて大山成子氏に確認した。[kagu]simama]di などである。
- (5) この調査表の記入済みサンプルは講演の際にスライドで示した。
- (6) 浅間の拙案2016は、草稿段階で一度試みてやめたものの、短長格フットの観点から再検討が必要かもしれない。
- (7) 服部1973は下降型を第2モーラに核のある型に変更したが、旧説の方がよいと考える。活用形には核が2回以上出るものもあるが、それらは複数単位形と認定すべきと思うものの、なお精査が必要である。ついでに、服部は首里方言では音節＝モーラであるとして、語中で子音を伴わない母音・半母音の前に必ず/ /を入れている。これの追従者も多いが、それではアクセント面での一般化ができず、不適切と見る（拙論2000：51-52）。
- (8) なお、2音節語に限らず長母音が現れる徳之島浅間方言に関しては、C系列における長音の出現環境は「語頭」ではなく「次末音節」と見るべきである。ローレンス2009も独立に同じ考えを述べている。

参考文献（紙幅の関係で特に「現在」と拙論は最小限に絞ったことをお断わりする。）

- 麻生玲子・小川晋史 2016「南琉球八重山波照間方言の三型アクセント」『言語研究』150: 87-115.
- 五十嵐陽介 “2018 JR-COGNATES_ver20180802（ver.5.1）.xlsx”,
https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=104771
- 上村幸雄（国立国語研究所）1963『沖縄語辞典』。 <https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okinawago/>.
- 上野善道 2000「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4（1）： 42-54.
 2016「徳之島浅間方言の名詞のアクセント体系」田窪行則・ジョン・ホイットマン・平子達也編『琉球諸語と古代日本語 日琉祖語の再建に向けて』くろしお出版：209-234.
- 大山成子 1962「琉球方言における二音節名詞のアクセント」『琉球方言』4: 3-56.
- 大湾政和 1933「琉球方言資料」沖縄県立師範学校郷土室。[扉に昭和7年とあるも年度か]
 1937a「語調を中心とする琉球語の研究」沖縄県師範学校。
 1937b「アクセントに現れた東京語と那覇語」『南島論叢』223-241。（1970再刊）
- 生塩睦子 1985「沖縄伊江島方言の語アクセント」『沖縄文化研究』11: 17-94.
- 金田一春彦 1960「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『東京外国語大学論集』7: 59-80.
 （1975『日本語の方言』教育出版に再録）
- 日下部文夫 1968「沖縄北部方言アクセント調査語彙について——「水」と「氷」——」『言語研究』52: 33-57.
 1984「沖縄北部方言における一音節名詞アクセントについて」『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』国書刊行会：461-497。（2018『生きたコトバをつかまえる』日下部文夫著作選、くろしお出版に再録。）

- 柴田武 1960「徳之島方言の音韻」『国語学』41: 14-27.
- 寺師忠夫 1956『奄美方言の研究』第2編「アクセントについて」私家版。[1981に再刊]
1961「奄美大島」『方言学講座第4巻 九州・琉球方言』東京堂出版:294-320.
- 仲宗根政善 1983『沖縄今帰仁方言辞典——今帰仁方言の研究・語彙編——』角川書店.
- 服部四郎 1933『アクセントと方言』国語科学講座Ⅶ, 明治書院.
1937「琉球語管見」『方言』7 (10) (1969『日本語の系統』岩波書店に再録)
1954「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』2: 2-50. (1960『言語学の方法』岩波書店に再録)
1955「琉球語」『世界言語概説 下巻』研究社: 318-352.
1959「奄美群島の諸方言について——沖縄・先島諸方言との比較——」『人類科学』11: 77-99. (『日本語の系統』に再録。) [再録に際し『人類科学』9と誤り, 岩波文庫版や諸氏も継承。また1958稿なれど刊行は1959。これも1958のまま継承。] (服部2018に上記を訂正して再録)
1973「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは?」『言語の科学』4: 1-61.
- 服部四郎著・上野善道補注 2018『日本祖語の再建』岩波書店
- 平山輝男 1937「アクセントから見た琉球方言の系統」『方言』7 (6) : 59-93.
1940『全日本アクセントの諸相』育英書院.
- 平山輝男・中本正智 1964『琉球与那国方言の研究』東京堂.
- 松森晶子 2010「多良間島の3型アクセントと「系列別語彙」」上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院: 490-503.
2017「北琉球におけるC系列2音節名詞の語頭音節の長音化」『日本語の研究』13 (1) : 1-17.
- ローレンス 2009「北琉球祖語の名詞音調——試論」『沖縄文化』43 (2) : 1-17.
2018「沖縄北部瀬底方言の音調体系再考」『國學院雑誌』119 (11) : 214-225.

付記

本稿は、2018年7月7日沖縄国際大学で開かれた沖縄言語研究センター40周年記念シンポジウムで行なった講演「これまでの琉球方言研究とこれから」を元に文字化したものである。当初は、さらに9月14日の同じく沖縄国際大学における日本音声学会講演「琉球方言音声・アクセントの諸相」の中的那覇方言アクセントの部分も取り入れたものであったが、誌面の都合で最終的に別稿とすることにした。本稿は2018年度JSPS科学研究費16K02619の研究成果でもある。